平成２９年度　第１回愛知県生涯学習審議会会議録

１　開催期日

平成２９年１０月３０日（月）午後３時４３分から午後５時２０分まで

２　場　所

愛知県議会議事堂ラウンジ

３　出席した委員の氏名　１６名

足立誠、大島純子、大島伸一、大村惠、岡本明子、恩田やす恵、木本文平、後藤澄江、志村貴子、服部重昭、林寛子、牧野秀泰、村上千代子、山内晴雄、吉川佳代、吉田とき枝

４　欠席した委員の氏名　３名

尾崎智、中塚正輝、渡会克明

５　会議に付した事項

議　題

（１）愛知県生涯学習推進計画の改訂について

（２）生涯学習推進計画における個別目標の達成状況等について

６　会議の経過

○　専門部会員交代の報告

松田武雄前委員の辞職により、６月から大村惠委員に交代したことを報告

○　副会長の選出

委員の互選により大村惠委員を副会長に選出

○　会議録署名人の指名

会長から牧野委員と村上委員を署名人に指名

○　愛知県生涯学習推進計画の改訂について

事務局から説明、質疑応答は別紙のとおり

○　生涯学習推進計画における個別目標の達成状況等について

事務局から説明、質疑応答は別紙のとおり

○　その他

【愛知県生涯学習推進計画の改訂について（資料１から３）】

〈各委員の意見趣旨〉

○　第２章２　団体・グループの老人クラブの記述について、「健康づくりや学習活動など生活を豊かにする活動と、社会奉仕や伝承活動など地域を豊かにする活動を行っています。」とあるが、社会奉仕や伝承活動も生活を豊かにする活動であるため、表現を変えるとよい。

→事務局：御指摘のように文言を修正する。

○　第３章１（３）芸術・文化の振興の現状と課題にある、読書関係の記述のなかで、学校読書調査の結果として、５月１か月の不読者率が小学生４％、中学生が１５．４％、高校生は５７．１％となっているが、これに対する施策の展開が甘いと思う。

→事務局：学齢が上がるにつれ、本を読まなくなる子どもが多くなるという結果であり、高校生になると部活や受験があり読書の時間がなくなるというのが一番大きな理由となる。読んでもらうような働きかけはしているが、なかなか好転しないという現状である。引き続き不読率が下がるような施策を講じていきたいと思う。

○　教育現場で何らかの対応をしていかないと、県の教育委員会がこういう方針を出したというだけでは何ともならない。現場との関係はあるか。

→事務局：学校の司書や先生が入った会議を開催し、どうしたら不読率が下がるか話し合いを行っている。学校ではいろいろと考えており、特色ある学校では上手に図書室を活用したりしているところである。学校以外の方からも意見をいただきながら、子どもの読書が充実するような施策を考えていきたい。本を読む習慣がない子たちが高校生になっているという現状がある。ターゲットは学齢期前ではないかというご意見を子ども読書の会議で委員からいただいている。まず、本が子どもたちにとって手に取りやすいところにあるということを気付かせる努力を行政、学校でしなければならない。小中学生の時から、あるいは定期健診の時に、母親に「本を読み聞かせたら子どもが情緒豊かな子に育つ」というＰＲをやっている。辛抱強くやっていく必要があり、これについては本当に課題だと思っている。もう少し施策が見える形の記述にしたい。

○　小中学校では朝読や家読ということを啓発している。学校ごとにそうした時間を設定すれば大分改善されると思う。各市町村で読書活動推進計画を作り、読書量、不読率の指標に沿って取り組んでいると思う。子どもたちは本当に時間がないので、時間をいかに確保するかが施策のヒントになると思う。

○　活字離れ、読書離れは学校現場でも大変課題となっており、読書の必要性を強く感じている。学校の図書室はいかに生徒を呼び込むか、いかに生徒が手にしたいと思う本を購入するかということに苦心している。調査対象月である５月は、部活動で時間がつぶれてしまう時期であると思う。別の時期であればまた違ってくるかもしれない。施策としては、

子ども読書活動推進計画に細かなことは書いてあると思う。それらの内容を学校現場でよく理解した上で、各校の実情に合う形の読書振興の手立てを講じなければいけない。一番良いのは、授業をする先生が本の楽しさや読書の魅力を授業の中で伝えるといいと思う。

→事務局：愛知県でも独自に県内の小中高校生を対象に調査をしている。調査対象月は１０月であり、不読率は、小学生は３～４％、中学生は９％、高校生は３５％くらいである。単純に比較は出来ないかもしれないが、全国調査より不読率が低い。ただし高校生になると高いので、小さいころからの読書の習慣付けが必要だと思う。乳幼児の健診の時に子どもに本を読み聞かせをすると良いという資料を配付したり、健康福祉部のやっているイクメンの行事などでリーフレットを配布したり、県立高校が市町村の公立図書館と連携し、いろいろな行事をやっている所もあるので、そのような事例を高校へ情報提供している。その辺の記述が少ないのではないかという御意見をいただいたので、検討して直したいと思う。

○　幼稚園の現場にいる。絵本の読み聞かせが、乳幼児が本と触れ合う第一歩となるが、家庭においてはいろいろな課題がある。絵本は高価であり、購入をためらう家庭も多い。図書館では古くなり貸出に耐えられない本のリサイクルがある。ＰＴＡ活動の中で読み聞かせの会があるので、本をたくさんもらってきて活用している。家庭で本を買うのが大変、ではどこで本に親しむのか、絵本はどこで調達するのかという時に、図書館や幼稚園、保育園の役割が出てくると思う。幼稚園、保育園でも本を揃えるのは非常にお金がかかり大変である。図書館がもっといろいろなところに浸透していき、図書館に行ったら絵本が借りられる、親子で行ったら楽しいということが浸透していくと良いと思う。図書館等に活躍してほしいと思う。

○　今のお話は極めて具体的である。お金の問題があるから本を読めるような環境自体が非常に限定されてくる。身の周りに十分本があるような環境を作れば読む機会が増えてくる。図書館という場をしっかりと活用するような状況を意識的に作り出すことにより本に触れる機会が出来るということは理屈としてはよく分かる。しかし、そもそも本を読むことにどれだけの意味があるかということについて、こういう場では皆さん「本を読まなければいけない。」といって、それはそうだと一致しているが、本当に大事なことだと委員の皆さんは思っているか。今の中学生の親は４０代くらいだと思うが、それくらいの世代は、本は重要だと思っている世代であり、本を読まなければいけないとあまり疑問もなく思っている世代だと思う。また、我々の世代は他のメディアがあまり無かったため、機会があれば本に触れるというのが一定の層あった。今そういう状況についてはどうなのか。

○　本を読んでいるかについて、ここにいる大人たちも読んでいるかというとなかなか厳しいものがある。本の問題は文学的なイメージが強いが、情操的なものを育てるということで幼児期からの本はとても大事である。私も孫育て世代であるが、本を買おうとすると本当に高く、年金生活者にとっては厳しい。若い世代もそうである。図書館に子どもを連れ

て来られる方は毎週のように来られて、とても面白いと言う。図書館のあり方として、もっと気楽に来て話が出来るという雰囲気もいるのかなと思う。図書館の構造そのものを見直す必要があるかと思う。

○　愛知子ども調査で、子どもに絵本の読み聞かせをしているかという質問を設けた。小さいころに子どもの情操や人生に対する目標を持つためには絵本が大事だということが言われてきたため、調査をしたところ、親の経済状況による差がかなりはっきり出たということがある。親が忙しく、経済的に苦しくて出来ないと思っていたが、絵本の価格自体が高く、親の所得により持てる子と持てない子が出ているということを聞き、両方の視点で見ていかなければならないと思った。読み聞かせの担い手と絵本の価格の両方の面で支援していく仕組みを作っていかなければいけないと思った。

○　まだ活字が読めない子に字だけの本を与えるのは無謀なことだが、私たちの頃は、絵本はあまり無かったが、活字はむさぼるように読んだ。活字ということに限定していけば、今、本は安価である。読みたいという気持ちになれば、古本屋でいくらでも買えるし、図書館を活用するなど読める方法はある。

○　良い本とは何かと考えた時に、家庭教育から考えると、感想文があるから課題図書を読みなさいなど、楽しむ本を排除し、教育的な本、ためになりそうな本を読ませるというのが今の１歳～３歳児の母親とお付き合いしている中でとても気になるところである。母親に本は楽しいということを啓発しないといけない。本は読まなければいけないものでなく、楽しいというところからスタートすると、年齢を重ねていっても本は楽しいと思っている子は本を読むと思うし、感想文のために読まなければという嫌な思いをしていた子は読まないのかなと思う。

○　読み聞かせなどをよくやっていることはわかる。家庭に親がいないことが多く、子どもに知恵がつく頃から保育園に預けている。親と一緒に読み、子どもが楽しんで何回でも本を繰り返し読むという環境が必要だと思う。母親と一緒にしばらくは読んでみて、それが楽しくなるように家庭でやっていただきたいと思う。自分が小さい頃は時間があったら本を読み、分からなかったら聞いてという形で育ってきたので、本を読むことは大好きである。

○　本の話は重要ということで皆さんから御意見をいただいた。いろいろな御意見が出ており、違った角度から見ると随分違う。今ここで結論を出すのは無理な話であるので、出された御意見を元にして、これからどういうことを検討していかなければならないのか、方向性も同時に検討していっていただきたい。

○　本を読むことは社会教育にとって一番大事で歴史がある。絵本は高いということは昔か

らそうである。１つの家庭で本を買い揃えられないため、またかつては今ほど図書館が発達していなかったため、住民が持ち寄ったり、共同で買ったりし、本をみんなで読み合おうという文庫活動がどこの市町村にもあり、それが公共の図書館づくりに繋がっていった。豊田市の図書館で子ども図書室という施設がある。もともとスーパーマーケットが私設図書館で持っていた絵本を、閉店した際にそこにボランティアで入っていた母親たちが譲り受け、場所を市が用意し、そこで絵本や児童書を子どもたちに提供する図書室をボランタリーベースで運営し、それを行政が支援するという形で今まで続いている。その形を見せてもらうと、子どもが騒いでも、赤ちゃんが寝ころがっていても大丈夫であり、おしゃべりをしながら本に親しんでいる。本というのは文化であり、人と人との関係の中で伝わっていくものである。文化としての本をいろいろな形で話題にし、一緒に読み合ってそれを楽しむという場が地域の中にあるというのがとても大事だと思う。もちろん幼稚園や保育所、学校もそうだが、公民館や図書館でも読書サークルや絵本の会といったサークルがどのくらいあるかというのが本を自分たちのものにしていく大事なプロセスだと思う。計画として入れるとしたら、市民の本をみんなのものにしていく活動をどう支援していくかという視点を入れていただけると良いと思う。高校生が難しいと思うのは、今の高校生が忙しいことである。自分の経験でも、時間がないと本を読まなかった。スマートフォンでラインのやりとりをしていると本は読めないなと思ったりする。だからといって高校生が全然読まないかというとそうでもなく、ライトノベルなど自分たちの興味・関心のある本は読んでいる。高校で是非やってほしいのは、一冊の本を読み、みんなで話をしようという、自由な空間を作ってもらえると、本を中心とした文化が広がっていくと思う。こういった活動を支援していくというのを入れていただくと良いと思う。

○　価値や理念というのが先にあり、読まなければいけないということと、いかに楽しく読むかという状況を作り出すということがセットでないといけない。本に親しむという問題は、地域や仲間で解決していくというのが１つのあり方。理念も大切だがそれだけでは先に行けないという御指摘である。

○　第２章１　家庭の現状と課題の部分について、少子化、核家族化で共働きの家庭が増え、親が家にいる時間がとても短いことが家庭の教育力の低下という点で問題と思う。母親たちと話していて驚いたことなのだが、「私は子どもを産んで１年だけ家にいて、子どもが１歳になったら保育園に入れて職場に復帰できるから、おむつをとらなくてもいい、それは保育園の仕事だから」と言う母親が出てきている。これまでは子育ての責任もあるけど仕事もしなければいけない、どうしようかという話が多かったが、子どもは預けてしまえばいいという話を聞いた時に、仕事をしていて子どもといる時間が短いということも、もしかしたら問題なのかもしれないと思った。企業などと一緒に協力をしていかないと、親が家庭で教育力を高めるための時間も短いままだと思う。また、健診の際に講演会などを行い、教育力を高めると良いというお話もあったが、母親たちは時間がなく、忙しく健診だけして帰ってしまう。足せるのであれば時間のなさというのも足していただけたらと思う。

→事務局：今の御指摘はその通りだと思う。母親たちの時間がないというのは聞いており、また健診の際にいろいろなことをやろうと思っているので、そこにこれ以上入れることは不可能と思っている。健診だけ済ませ次の用事に行く方もたくさんいるので、難しいところである。大事なことを伝えていくという視点は大切であり、現状の部分では記載をさせていただく。本課の事業で、企業の研修の場で家庭教育を伝えていく事業もやっているので、そういったことも対応として書いていけると思う。

○　そもそも家庭のあり方が変わってきている。家庭の教育も変化しつつある。

○　家庭の力だけでなく地域の力もとても弱くなっている。これまではいわゆる主婦の方たちが学校や地域の行事に協力していたのが、今働いていて時間が無いと聞く。参加出来ないから子ども会もやめましょうというところまで来ている。その中で、どう社会教育、地域力を高めていくかというのは違う考え方で考えなければならないと思う。図書館や博物館などにアクセスしにくい人もいる。開かれた学校に期待する。学校の方からすると迷惑かもしれないが､例えば小学校区くらいのところであればアクセスしにくいとは思わない。そういうところをコアにして何かできないか。例えば小学校の図書室で絵本を貸し出すということがあってもいいと思う。集まりやすい場所がなければ世代間交流もつながっていかない。学校になるのか、公民館になるのか、地域により違うと思うが、集まりやすい場所、地域のコアになる場所が小学校区くらいに１つあるのが理想だと思う。

○　地域力そのものが非常に弱くなってきている。昔は、向こう３軒両隣というのが地域の中にあったが、今は全然ない。そういう関係が人のつながりを希薄にしてきている。まちづくりを本当に考えていかないと、生涯学習は非常に難しい。

○　基本的な問題だと思う。家庭が非常に不安定になっていて、それを支える地域も不安定になっている。子どもということに関して言えば、育てる環境をどうしていくのかというのを計画の１つの柱にしてほしい。子ども会など社会教育団体のことを言うと、１９９０年代の終わりから共働き家庭が当たり前の時代に入り、もう一度働くのをやめて家庭に入るというのは言えない話である。保護者は子どもを育てる第一義的な責任があるが、保護者だけが子育てをするという仕組みを変えていく必要があるということはずっと言われてきた。地域が子どもを育てるということが言われてきたが、その地域を支えてきたのが専業主婦を中心とした女性たちであったので、地域も支え手がいなくなる。高齢者は、６５歳またはその後も働くということで、地域に帰るのは６０代後半や７０代からということになると、地域の支え手は高齢者が中心になるという訳にもなかなかいかないだろう。どのように地域を支えるのかというと、1 つは原点に戻ること。１９６０年代以前は地域の皆が参加していて、女性に任せればいいとか高齢者に任せればいいということではなかった。子どもからお年寄りまでみんなが関わるのが地域、社会であって、男性の働き手は地

域に参加しなくてもいいということではなかった。皆がいかに参加できる地域の仕組みをつくるかというのが大事になってきており、それを全国で模索していると思う。子ども会やボーイスカウト、ガールスカウトなど子ども団体でいうと、保護者だけで支えるのではなく、子どもと関わりたい、団体を支えたいと思いろいろな人が参加できる仕組みが大事になってきている。特に高校生や大学生はいろいろな力を持っており、そういった若い人たちが地域に出番があるとものすごい力を発揮する。中学校くらいから学校中心の生活になってしまい、地域から離れてしまうので、どのように地域と結び付けるか。中学生、高校生にとって地域のことを知るということは自分の将来のキャリアや、どうやって生きていくかを考える上でとても大事なことであるので、高校生、大学生もそこで学び、地域の人も高校生、大学生と一緒に地域を作っていくというつながりをつくっていく、その結節点、コーディネートをどこが出来るかというのが大事なこと。１つは公民館であるし、もう１つは地域学校協働本部になる。もう一度地域をコーディネートしようとするいろいろな施策が出ているので、それぞれの市町村でどういうやり方でやれば、もう一度皆が参加できる地域にできるのかというのを考えていくことが大事な課題だと思う。

【生涯学習推進計画における個別目標の達成状況等について（資料４）】

○　全国学力・学習状況調査で「学習意欲」に関係する項目に肯定的に答えた児童生徒数の割合について、これをもって学習意欲を考えるということだと思うが、調査では自己肯定感がどれほどあるか測る質問もあったかと思う。計画の達成状況で、現在の項目がふさわしいか、もっと大きな意味合いで自己肯定感を持っている子を何%にするという項目がふさわしいのか、なぜこの項目が出てきたのか教えていただきたい。

→事務局：現行計画を作った時の目標であり、こういった場で御議論いただいて設定したものである。今の感覚からすると、もっと違うものがあるだろうという御指摘だと思う。これについては、今回改訂版を作るに当たり、こういった目標も見直すべきだと思っている。個別目標については、違った形での御議論をいただきたいと思う。

○　３（５）　ファミリー・フレンドリー企業の登録数をみると、目標と比較して残念ながら芳しくない。母親も忙しく家にいる時間が少ないという話とも関連していると思う。今、安倍首相が力を入れていることに、働き方改革がある。家庭の教育力を大きく充実させる一つの処方箋としては、働き方改革に期待している。父親も母親も家庭で子どもと触れ合い教育する時間を増やすことが１つの解決策ではないかと思う。計画の中で企業のことを書いたのはいいことだったと思うが、残念ながらファミリー・フレンドリー企業の登録数が伸び悩んでいる気がする。是非御指導していただきたいと思う。地域の教育力についても、高齢者が地域の中で自分の力を生かし生きていくということで、地域の教育の層が厚くなっていくことがいいと思う。若い母親に戻ってこいというのは無理と思う。また、これだけスマートフォンが若い人の生活に入っている状態で、スマートフォンで得られる情報と紙で得られる情報がどう違うのかというのが、これから課題になっていくのではない

かと思う。スマートフォンの普及が生涯学習そのものの考え方に影響を与える気がする。

○　超高齢社会の流れの中で、技術革新があり、その中で人口が減るという、これまでの歴史上どこにもないような現象が起こっている。これまで培ってきた価値観が完全に壊れる。社会のあり方も家庭のあり方も、かつてのあり方ではなく、間違いなく再編をしなければならない。教育は大きなファクターで、これがしっかりしていればなんだかんだ言っても残すべきものは残る感じがするが、ここが崩れると本当に駄目になる。今は従来の手法や考え方が通用しなくなっている。こういう社会の中で、生涯学習は何か、今日は高齢者問題についてはあまり出なかったが、現代社会を支えていくような年代、それと高齢者、このあり方についても全く根本を変えていかなければいけない時代に入っていく。この後の分科会でさらに議論を深めていただき、答えを出すのにこだわるのではなくて、少しでも何らかの方向性を示すことが出来るようなものが出てくれば素晴らしいことだと思う。